
樽山匠のにぎやかな日常

ノンキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

樽山匠のにぎやかな日常

【Nコード】

N3843N

【作者名】

ノンキ

【あらすじ】

この地域でトップレベルの進学校、柵の台高校に進学した樽山兄弟とその周りの人間が織り成すドタバタ小説。どんな事になるやら…。

*更新はきまぐれですので、とても遅いのでよろしく願います。

メインの登場人物（前書き）

こんなものを書きました。よろしくおねがいます。

メインの登場人物

樽山 匠 たるやま たくみ

本作の主人公。勉強しなくてもテストで100点取れる意味不明な天才。

ケンカに強く、柵の台第三中学の守護神として不良からおそれられた存在。

高校生になり柵の台高校に進学する。

好きな食べ物はラーメンを中心とした麺類。

父親と母親が中学生の時から長期海外出張に出かけているため、妹の恵と二人で暮らしている。

樽山 恵 たるやま めぐみ

匠の双子の妹。さすがに兄よりは劣るが勉強とケンカに強い。

そっちよりスポーツのほうが得意である。

兄と同じく柵の台高校に進学した。

好きな食べ物はカレーで、中三の時晩御飯のメニューで大喧嘩した履歴をもつ（その時はカレーラーメンになった）。

メインの登場人物（後書き）

作者は初心者ですのでとんでもない事を書くかもしれません。その時はよろしくお願いします。

1話 入学式

暖かな日差しが窓から差し込み、体育館に光をおとす。こうなつてくると眠くなるのは必然だ。とくにまだ寒さが残り、さらに殺人的な麻醉力を誇る校長の話退屈な長話を聞いている最中ならなおさらだ。

「であるからして……」

まだ続くのか。すでに新入生の3分の2はねてるぞ。隣に座る妹を見ると、案の定寝てる。

「とりあえず、校長として入学おめでとうと言っておきます。」

……やつと終わったか。昔から思うが偉い人はなんで長話が好きなのだろうか？ 周りを見るとさすがに何人かは起きてきた。妹もそろそろ起こすか。

「めぐみ。おきろ。」

…起きない。魔法の言葉でも使うか。魔法の言葉といっても簡単だ。こいつの好物を言えばいい。

「カレー。」

言つてすぐ（0.5秒後）にガバツと起きだした。

「……私寝てた？」

「寝てた。」

すると僕の隣で

「校長の話が始まって1分で寝てたぞ。」

……頭が痛い。

僕は樽山匠たるやまたくみ。今日からここ、柵の台高校に通う高校1年生だ。

家族構成は僕と双子の妹の恵めぐみ、それに両親だが、両親は海外で仕事をするので中学のときからほとんど家にいない。あと隣町にいとこがいる。このいとこは恵にとってもよく似ているが、中身はしっかりした子である。

友人関係は：悲しい事にこの学校で知っている人がいない。：まあなんとかなるだろう。

さて僕と妹の詳しい紹介だが、僕と妹は双子といっても見た目や中身は正反対だったりする。たとえば好きな食べ物で、僕はラーメンが好きだが、恵はカレー好きである（この前晩御飯作るときに、どっちも譲らず、結局カレーラーメンになったときがあった）。

ほかに容姿は僕が父さんそっくりで恵が母さんそっくりだ。ただ髪の色は僕が母さんと同じ明るい茶色で恵が父さんと同じ黒である。ただ髪の色に関してはあまり触れたくない。理由は髪の色で中学生の時生徒指導の先生と大喧嘩したことがあるからだ。

まあこんなところかな。

ホームルーム

かつたるい入学式が終わりHRも終わって（案の定担任の先生と髪の色でもめた）後は帰るだけである。明日からは1・Dに通う事になる。なんて考えてたら後ろから肩を叩かれた。誰だろうと思って振り返ってみると髪がぼさぼさの青年が居た。

「よう。久しぶりだな、匠。」

……誰だっけ？

「忘れたのかよ。ほら、小学校でよくケンカした……」

思い出した。こいつは小学校の時仲良かった野島のしま けんいち謙一だ。たしか中学校は第一中学に行ったはず。こいつもケンカが強くてよくケ

ンカをしたもんだ。

「久しぶり謙一。しばらく会わないから忘れてた。」

「忘れるなよオイ。まあいいや。ところで恵ちゃん元気？」

元気すぎて疲れるというところは大笑いした。

「にーちゃん。帰ろう。あれ、たしか……謙一君だっけ？」

「誰かさんと違ってすぐ思いついたね。」

その誰かさんはそっぽを向いてごまかした。

「久しぶりだね。第一中はどうだったの？」

その後しばらく雑談したり、メアドを交換したりしてから三人で帰り始めた。ああ、知り合いが同じクラスにいて良かった。うんこれから楽しくなりそうだ。

「そつえばお昼どうする？」

…あ。

1話 入学式（後書き）

なんかぐだぐだです。こんなのでよければ読んでやってください

2話 結成！柵の台高校探偵倶楽部

入学式が終わって1ヶ月経つが、僕も恵も部活に入ってない。理由は単純だ。出来るものがまったく無いからだ。

陸上部〓走るのは得意だが、それは競技としてではなく、妹を追いかけているためだ。

その他運動部〓ルールがわからん（一般常識程度には知っているが）。

文芸部〓文才がない。

英語部〓なんで海外に行かないのに英語漬けになんなくてはいけないのだ。

軽音楽部〓楽器が弾けない。 e t c , e t c 。

そんなわけで現在兄妹そろって帰宅部。

「そんなんじゃ、だめじゃん。2人とも中学の時何やってたんだよ。」

「

昼休みに3人（僕、恵、謙一）で弁当を食っていると謙一からそんな質問があった。

「「帰宅部です」」

「……揃って言うな。」

「そういう謙一はどうなのよ？」

恵が反撃に出た。

「僕？僕は生徒会。」

恵、あっさり撃沈。

「おまえはすごいよなあ。生徒会をやるなんて。」

僕が感心していると

「そうでもないよ。」

と当たり前のように言った。なんか悔しい。

お昼を食べ終わると僕は恵と相談した。

「まず、どうするか。」

「新たに作るとかは？」

それはいい考えだ。この学校、「クラブ設立の届け出」という用紙を出すだけで認められる。ただ僕らには問題があった。

「人数3人もいないのにどうやって出すんだよ。」

この学校のクラブ設立の条件は3人以上集まる事だ。集まれない事にはクラブとして認められないし、活動も出来ない。

「勧誘すればいいじゃん。勧誘活動は例外だよ。」

……忘れてた。そうすれば良かったじゃん。恵よ。あなたはそうやってアイデアを述べてって下さい。

「よし。じゃあ勧誘はするとして、まずどんなクラブにする？お茶会しておしゃべりで終わらせる。」

どこの軽音部だ。だいたいあんなこととして学校が黙ってるのがすげえよ。ああにしてもなんで最終話なんだろう？

「…何の話？」

ずっと聞いてた謙一が質問する。

「ん？まあ某アニメのネタ。」

「よし、おまえアニメ研究会入れ。」

何だよソレ。僕はアニオタじゃねえつつの。

「ついでにお前たちの好きなものは？」

なんだろう。料理かな？あつもつと好きなものがあつた。

「何だ？」

「「ミステリーだ、ミステリー。」」

てな訳で翌日（なにがてな訳でだ）。僕らは「ミステリー研究会（仮）」のポスターを作り、掲示板に張りつけた。あとは教室で待つのみ。

「来ないね。」

…全く来ない。この学校やっぱり部活数が文化系だけで50を超えるというし、やっぱり駄目かな（てか、まくら投げ愛好会とかって文化系なの？）。

「諦めるか。」

「そうね。」

窓から夕日が差し込んできたし、そろそろ夕飯の時間だ。さて帰ろうと思った時、教室のドアが開いた。

「あのー、ミステリー研究会の人ですか？」

「……はい。そうですけど。」

どうしたんだろう。まさか生徒会が動いたか！？こうなったら奥の手をつかうか。って何やってんだ僕は（それより奥の手って）？
「あの、ここに入部させて下さい。」

……これは夢かな？いいや夢じゃない。てことは、だ。

「「熱烈大歓迎します。」」

「は、はあ。」

「えーっと、自己紹介して。」

「えっと、1年A組の石山^{いしやまとなり}友也といいます。よろしく願います。」

丁寧だなあ。

「うんよろしく。僕は1年D組の樽山匠。こっちは同じく1年D組で、妹の恵だよ。」

「へえ。双子さんですか。」

とまあこんな話をしていたら突然謙一が飛び込んできた。

「ミステリー研究会という名称、変えて。」

話を聞くと他の人がさっさと申請してしまったらしい。てかおい作者。おもいつきり省略するなよ。

「どうする？」

「どうするって、名前変えるしかないだろう。」

「でもどんな名前がありますか？」

それが問題だ。どうしよう。出来れば人が揃ったことだし今日中に決めたい。

「柵の台探偵事務所とかは？」

恵よ、いつから僕らは探偵なんだ。あつ、そうだ。

「よし、考えたのを発表する。」

二人がこつちを向く。そして発表した。

「名前は、柵の台高校探偵倶楽部だ。異議のある人は？」

「「意義なし。」」

とまあこんな感じで話が決まった。明日から探偵倶楽部は本格的に活動する。楽しみだなあ。

2話 結成！柵の台高校探偵倶楽部（後書き）

なんとかかけた。次も頑張ります。

3話 探偵倶楽部の活動（前編）（前書き）

なんとか3話目です。苦情、誤字・脱字があつたらドンドン指摘して下さい。

3話 探偵倶楽部の活動（前編）

さて柵の台高校探偵倶楽部が正式に部活として認められて一か月。毎日柵の台高校の図書室で事件に立ち向かう。訳もなく、平和で退屈な日常を、推理小説を読んだり、面白いミステリーを紹介し合ったりという毎日である。なんかとある女子校の軽音楽部見たいな感じである。違うところはお茶とお菓子がないところである。

「そんなんでいいの？」

謙一が突っ込んでくるがしょうがない。探偵倶楽部と言っているが事件は早々無いんだし、第一校内の事件は風紀委員や治安維持部が何とかしてくれるだろう。

「まあそうだけどね。」

この学校、校内の治安維持はクラス内から1名選抜される風紀委員と、志願者からなる治安維持部が担当している（大きな事件は当たり前だが教師が担当する）。まあほとんど事件は無いわけだが。

「それよりこの前テレビ見てたらさあ……」

恵よ。少し騒がしい。あといきなり話変えるな。

放課後

図書室の隅っこにある推理小説コーナー。ここのそばにあるテールブルが柵の台高校探偵倶楽部の活動場所だ。

「ミステリー読んで思うんですけど、まず思う事はなぜ刑事課が殺人課とかにされているのが不思議なんですよね。」

こう話すのは部員の石山友也君だ。僕と恵は友也と呼んでいる。

1ヶ月経つうちに僕らはすっかり親しくなり、今じゃお互いを名前前で呼び合う仲までになった。

「まあそれは仕方がないんじゃない？ 捜査一課といってもわかんない人はいるわけだし、あるいは警察がわかんない素人が書いたもの

かもしれないし。」

「でも殺人課は無いと思うよ。それじゃあ毎日そのあたりで殺人事件があるみたいだし。」

まあこんな話をして一日を終わらせる。

ただたまにミステリーとは関係ない話をする。例えば

「テレビでやってたマジックで…」
とか

「この間うちのクラスの奴で…」

とか言う話をして帰るときもある。こんな毎日が続けばいいが（謙一的には良くないだろうが）、突然狂う時がある。今回は僕たちが動かざるを得ない状況になった話である。

「さて帰りますか。下校時刻だし。」

雨と湿気が大気を支配する6月のある日、いつものように雑談して帰ろうとしたら図書室に珍客が飛び込んできた。

「あれ、謙一。どうした？」

図書室に飛び込んだのは今生徒会室に居る筈の謙一である。

「知り合いですか？」

ああ友也は知らないんだ。

「小学校の時の友達で、同じクラスの野島謙一君だよ。」

「野島謙一です。君が探偵倶楽部の友也君ね。よろしく。」

そう言つと謙一はにっこり笑った。

「あつ、こちらこそよろしくお願いします。」

一通り自己紹介を終えた所で本題に入る。

「実は生徒会のほうで探偵倶楽部の存在意義が問われているんだ。」

「存在意義？」

「おもに目立つた活動はしてないし、図書室占領するのは良くないと文芸部から苦情が来てるんだ。」

あっちの場合、すぐに資料が手に入る図書室で活動している僕ら

に嫉妬しているだけだろう。

「というわけでどうするか。」

謙一が生徒会に帰った後に僕らは会議を開いた。

「文化祭でミステリー発表するとか。」

これは友也の案。

「…お客が来ると思う？」

「…おもいません。」

だよな。

「じゃあどうするのよ。」

それを今考えているんだろう。突っ込んだ時に

「あの〜。」

後ろから話しかけられたので振り向くと、そこには背の高い女子がいた。ボウタイの色からして3年生かな？

「ここ、探偵倶楽部ですよね。」

ここは僕が答えるべきだろうか？二人を見ると我関せずという顔をしている。溜息…。

「実は猫がいなくなったので探してほしいのですが。」

こちらは某アニメの少年探偵団か？突っ込もうかと思ったが止めといた。

こうして、柵の台高校探偵倶楽部初の活動が決定した。

3話 探偵倶楽部の活動（前編）（後書き）

学校が始まったので更新が土日、祝日のヒマな日だけになります。
ですので更新がとても遅くなりますのでご了承ください。

4話 探偵倶楽部の活動（後編）（前書き）

大変更新が遅れて申し訳ありませんでした。

4話 探偵倶楽部の活動（後編）

探偵倶楽部結成最初の活動は、先輩の飼い猫探しになった。正直言つて、そのうち帰ってくるんじゃないかと思つた。

「でも一週間も家を空けることなんて今までなかったんで心配なんですけど。」

それは心配するだろうな。先輩の話を聞いてそう思つた僕だった。集会場は探しましたか？」

そういえば猫は一定の場所に集まつて集会をするというのを前に聞いた事がある。

「でも夜中とか、そうでなくても翌日には必ず帰ってきたので。それに探しましたけどそれらしき猫は居なくて。」

それもそうだ。まず飼い主だったら普段行く場所をさがすよな。とここで重要な事に気がついた。そうだよな。聞かなくてどうする。

「まずあなたの飼い猫の特徴とかがありますか？」

うしろで部員二人が「あ、うっかりしてた」て顔をする。まったく、特徴もわかんないのにどうやって探すつもりだったんだ。やれやれ。

「いや、匠（兄ちゃん）が言えた立場じゃないから。」

見せてもらった猫は普通の三毛猫だった。首輪が赤で、特徴といえばそれぐらいだった。ただ眼が細い。

「生まれつきなのか買った時から目が異常に細いんです。ただ盲目という訳ではないそうです。」

よく見えるな。それとも心の眼というやつなのか？ばあちゃん

も習得してない…

「もどつてこい。」

友也が自分の世界から戻してくれた。

「いなくなつた時どうなつていたんですか？」

自分の世界に行っている間に恵が聞き込みをしていた。

「私は学校に行っていたので詳しい事は解りませんが、母が言うにはいつも散歩に行く時間に出て行つたきり帰つて来なくなつたそうです。いなくなつたと知つた時は近所の動物病院に猫の事故がないか訊いてみましたが、そんな事故は無いそうです。」

まったく面倒な失踪事件だ。まあ探してほしいと頼まれたからには探すしかない。というわけで僕は明日から猫の搜索をすると先輩に行つて、毎日ここに来て貰うように言つと、僕は帰宅した。

「しかし探し出すことが出来るかねえ。」

現在下校中。恵と一緒に今回受けた内容を考えていた。歩いている場所は幹線道路で、よく様々なトラックが真横を通る。

「まあやってみなきゃ分かんないじゃない。ともかく先輩の家は柵の台2丁目らしいし、そこから重点的に探しましょう。」

翌日の放課後

さつそく僕は柵の台2丁目を中心に猫の搜索をした。搜索の仕方
方は聞き込み、路地を通る、塀の上を見る等々。でも見つからない。
一軒ずつの家に聞き込みしても、猫なら通れそうな路地を見ても、
2丁目に限らず柵の台地区全域を探しても見つからなかった。そう
こうするうちに一週間経ってしまった。先輩はまだ見つからない事
に少しイライラしているようだ（当たり前か）。

「本当に見つかるんですか？」

相手に威圧をかけるような言い方がかえって怖い。なんかこの

空気が一気に100tの重りに変わったように重くなった。

「なんだ。まだ見つからないのか。」

いきなり話しかけるな謙一。読者がビックリする。

「まあいいじゃないか。どんな状況…ってあれ？」

謙一が猫の写真を見て首をかしげる。

「知ってるの？」

「たしか3日前に花の台のほうへチャリで出かけたときに見かけたぞ。たしか花の台5丁目の魚屋に居た気がするけど…」

既に謙一の言葉は耳に入っていない。僕らと先輩はいそいで花の台5丁目の魚屋に向かった。

「その猫はたしかに家で預かっているよ。あ、ほら。散歩から帰ってきた。」

魚屋の店主に言われて振り返ると、そこには

「三毛太！」

三毛太というのか、その猫は。たしかに写真で見たとおり目が細い。

まあ探偵倶楽部が見つけたわけではないが、結果的に猫が見つかったのでよかったよかった。

「で、結局廃部は免れたのかな？」

「…どうなんだろう。」

5話 テスト前（前書き）

伝説・改先生、かつてに先生の小説ネタ出して申し訳ございません

5話 テスト前

この間の「迷える子猫」事件（命名恵）が解決してしばらく後の話である。

僕ら探偵倶楽部は図書室の隅っこで相変わらずだらだら過ごしている。まあ事件があつたらあつたで忙しいし、無かつたら無かつたで逆に暇だ。部室があれば私物の持ち込みが出来るのだが、あいにくこの学校、倶楽部の数がとても多い。設立方法は簡単だし、第一顧問の先生も要らない。

そんなこの学校では、部活動の存続競争が激しく、予算会議で相手のクラブを潰して自分のクラブに少しでも多く部費をもらおうと頑張る（もっと違う事を頑張れよと言いたくなるのは僕だけだろうか）。まあ我が探偵倶楽部は部費が要らないので（あつても使い道がない）いくら予算要望会議で罵詈雑言を浴びようがどうってことのない部活である。

「でも合宿は行きたいよ。」

……なにしに合宿へ行くのだ、友也よ。まあ部費より部室が欲しいが、まず無理だろう。そんな事を考えていたらそばのテーブルに謙一が座っていた。

「あれ、なんで謙一君が此处にいるの？」

愚問だ。読書しにきた……わけではなさそうだ。教科書とノートを広げて何やっている。

「おまえら、明後日は期末試験だぞ。」

……キマツシケン？なにそれ、おいしいの？

「……現実逃避するな。」

「でも兄ちゃんの場合は勉強しないでテスト百点だったから大丈夫じゃない？」

まあたしかにそうだったけど……ってなんか友也と謙一が見ている。しかもなんか殺気が感じられるような……。

「『Φενη——ん!』」

「わーーーー！！！！？」

いきなり二人して飛びかかってきた。

「ちよつとまで！なぜ襲う！？」

「勉強せずに百点は人類の敵じゃー!!!」

「殺せ殺せ――！機関銃を打ち込め――！」

「ちよつと謙二君、落ち着いて。友也君も……つてキャ！なんか周りの人も……。」

「あいつを殺せー！！」

「地球から追い出してしまえー！！！」

「落ち着けー！」

「落ち着けるか――!!」

「こらー、図書室で暴れブルゴウア」

図書室の先生が止めようとしたが巻き添えを食らって吹っ飛ばされてしまった。

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「
申し訳ございませんでした!!!」

└┐

図書室内暴動事件（命名恵）は先生だけでは収拾がつかなかった。ので風紀委員と治安維持部が特殊部隊を編成し、図書室を完全封鎖した上で突入。突入開始から10分後、暴動は鎮まった。被害は軽傷者が5名と、本棚の棚から数冊本が落ちただけで済んだ。

「まったく、おまえらはなんでこんなに暴れるんだ。暴れるなら校庭に行け。」

ちなみに今回の件で探偵倶楽部はおとりつぶしかと思われたが、

そもその発端が部活動と関係ないというのと、暴動の中に生徒会員（これは謙一のこと）が入っていたので、暴動事件の詳しい事を黙っているという条件で、今回の件は不問にされた。あゝ神様、仏様、生徒会長様である。ありがたや、ありがたや。

「ありがたやじゃない！！！！！！」

図書室の先生、とうとう切れるが僕と恵はまだ平気（周りはとてもなくびくびくしているが）。なぜならそれよりもっと怖い存在を知っているからだ。ソレについてはまた今度にも。

下校中by謙一

「あゝなんか疲れた。」

「ほんとだるい。」

「もう図書室行けないかも……」

「……生徒会首にならないかな？」

上から匠、恵、友也、僕である。あの後僕たちは二度と図書室で暴れないことと書かれた誓約書にサインして、今帰宅途中である。

しかしなんであんな事をしたか自分でもわからん。ただもう二度と生徒会室に入れないのかなと考えてしまう。

「あつ、生徒会長があの場合不問にしてあげるって。」

……よかった。

「あつそうだ。明日テスト前休みだからみんなで勉強会しようよ。」
勉強会か、いい案だな恵。みんなでやればいろいろと苦手克服出来るだろうし、第一勉強しないで百点取るやつがいるもんな。

「でも僕も人並みに勉強はするよ。ただ昔抜き打ちテストがあった時百点取っただけで。」

そついう事か。

「いや、それでもすげえよ。」

友也の言う事も一理ある。

「でも恵だつて同じ抜き打ちテストでクラス2位とつたじゃん。」

「おまえらすげえな。」

ホントにこの兄妹はなんでもパーフェクトだな。話によると家事もすべてこなすらしい。友也の言うとおりおまえらすげえだ。

謙 side 終了

翌日

「おじゃまします。」

二人が学校鞆抱えてやってきた。

「いらつしやうい。」

「しかしおまえんち、相変わらず広いな。」

謙一の言う事はもつともだ。僕の家はじいちゃんがこのあたりの地主だった関係でいえが大きい。ついでに友也は呆然としている。

まあそんなこんなで僕の部屋です。友也と謙一は部屋に着くなり周りをきよるきよる見回す。

「なにかあった？」

「いや、男子の部屋は散らかっているのが定番だからさ。」

失敬だな。毎日部屋の掃除は欠かさないぞ。

「クラスの友達がギャルゲー持ってたんで持ってるんじゃないかなと。」

持ってねえ。なんで二次元で恋愛なのだ。第一僕自身恋愛は現実のカップルがおもしろい。僕自身はやらないけどL#L（#は伏字）のあのカップルはいい。

「何の話？」

友也と謙一が首をかしげる。

「ん、まあ遼佑先輩と唯先輩の拳式は是非呼んで欲しいなと思っただけ。」

二人とも？を頭に浮かべる。

「あつ、拳式は大学卒業後だって。」

そういえばそんだった。ついでに二人は？を30個ぐらい頭に浮かべてることだろう。まあ気にするな。いずれわかる。

「ここはXを代入して…」

「この原子とこの原子が…」

現在勉強会は何も問題なく進む。ほとんど僕と恵が二人がわからない所や苦手な所教えてたまに友也が時事問題を、謙一が地理と歴史を教えている。まあそんなこんなで勉強会は終わってしまった。

「おい作者。もっと描写しろよ。」

『何書けって言うんだよ。』

「それもそうだが、考えろよ。」

『いいじゃん』

「あんまり良くないぞ」

勉強会が終わると僕らはのんびりおしゃべりを始めた。

「僕は昔から付き合いがある幼馴染っていないんだよね。」

「謙一君は小学校からだしね。」

「僕は昔から付き合いのある友達がまったくいなくてさ、探偵倶楽部入って良かったよ。」

「僕はクラス名簿見たとき驚いたよ。樽山という苗字があったからね。もつともこいつはあんまり覚えてなかったけど。」

「ごめんごめん。」

「そういえば3人はどういういきさつで知り合ったの？」

「小学校でいじめられているやつを助けたらそれが謙一だったんだよ。いまじゃ喧嘩強いけどさ。」

「おまえにはかなわないよ。だって第三中の守護神ゴールキーパーといえはお前有名だったし。」

「えっ、匠ゴールキーパーだったの！？」

「兄ちゃんこのあたりの不良にとても怖がれていたからね。」

「てかなんで友也が知っているの？」

「だって第二中の不良を一分で追い払った奴ですから。」

「まあんな事言ったら謙一も怖いぞ。なっ第一中の親分。」

「それを言っな。」

「「えっ、謙一は第一中の親分だったの？」」

「そうだよ。こいつは第一中の生徒会長までしてその裏で第一中の不良を従えていた第一中の親分だぞ。」

「まあいいけどさ。」

まあそんな話をして僕らは解散となった。テストではみんなクラストップに入るほどの成績で、学年では1位僕、2位恵、3位謙一、4位友也という順番になり、みんな全教科90点以上（僕は全科百点）をとるという快挙を成し遂げました。めでたしめでたし。

余談だがこの結果を受けて東大卒業を鼻にかけて生徒にいじわるするのが好きな先生が、悔しがって僕に東大入試レベルだという問題をノーヒントで出して僕があっさり解いた為、しばらく授業が成り立たなかった話はまた別の機会に。

5話 テスト前（後書き）

匠「僕と恵は部屋は毎日掃除するけどノンキは？」

ノンキ「やっていません。」

恵「…威張ることじゃないでしょう。」

6話 反抗（生徒会室襲撃事件）（前書き）

匠「なぜこんな話を作る。」

ノンキ「いや、なんか作りたくなっただけ。」

恵「まったく、警察まで出てくるなんてなんなのよ。」

ノンキ「ネタばらしするなよ。」

6話 反抗（生徒会室襲撃事件）

期末試験も終わりましたり平和な日々を過ごす探偵倶楽部一同。
いや、クーラーは人類の偉大なる発明品の一つだね。

季節は6月最終日。夏休みをあとどれくらいだろうとクーラーの
きいた涼しい図書室で早くも数えてしまう僕は罪作りな奴だろうか。
クーラーをここまで強調しているのは簡単だ。外がとてつもなく
暑いのだ。期末試験が始まる頃に梅雨が明けた。梅雨が明けたとた
んに太陽が仕事量を増加させた。勘弁してほしい。

現在外の気温は携帯の情報によると31。…死ななくてもしば
らく外でたらインドア派の死体ができる。よく運動部で死者が出な
いと感心する。外をちらつと見ると陸上部や野球部、軟式野球同好
会がグラウンドを走り回っている。そのそばではまくら投げ同好会
がまくらを楽しそうに投げ合っており、その近くでは柔道部が正座
をしている。うーん、このクラブも見るからに暑そうだ。熱中症に
だけはご注意ください。

と思つたら校庭の隅に生えている大きな桜の木の下で何人か横に
なっている。あれは熱中症患者だろう。ちなみに余談だが作者はこ
の夏に軽い熱中症になった。本人曰くとてつもなく頭が痛かったら
しい。

『みなさんも熱中症には気をつけましょう』by 作者

しゃしゃりでるな馬鹿作者。第一時期的にもう遅いわ。ところで
この大きな桜の木は柵の台の桜の名所の一つだ。樹齡はたしか70
年を超えとか超えないとか。ただ父さんと母さんが生まれたとき
にはこの桜はこのあたりの名所といわれるようになったらしい。ま
あこのあたりでお花見するなら学校から歩いて10分ほどの距離に
ある高台が一番の名所だ。

「そういえばこの学校って生徒会が特殊ですよね。」

話変えるな友也。あとそれは今更だろう。この学校の生徒会は確かに特殊で1年生も4月から希望すれば雑用係したうばに就く事が出来、実力次第では最終的に生徒会長までなる事も出来る。現に謙一はそこに入ったが、実力でこの間幹部候補生に上り詰めた。

ちなみにこの生徒会の階級は

生徒会長<<副生徒会長<<書記<<生徒会組織内各部長<<幹部候補生<<雑用係

とまあ大雑把に説明するとこんな感じだ。生徒会組織というのは簡単にいえば生徒会内での仕事を分担したものだ。予算部では予算決定するし、監査部では生徒会内や部活内の監視等を行う。余談だが謙一は部活管理部という部活を管理する部署に所属している。生徒会長は毎年9月に生徒会組織内で選挙を行う。ただ生徒会内は派閥とかあってそれほど民主主義な選挙は行えないとか。

「この学校の生徒会って、ほんと複雑でドロドロよね。」

恵の言う通りだ。第一この学校は教師が生徒会に対してほったらかしだ。そのため生徒会組織やクラブがややこしくなる。まったくこの学校の校風は『生徒の自主性』だが、『野放し・やり放題』に変えたほうがいいんじゃないかと思う。やれやれ。

「まあともかく、残り少ない1学期をどう過ごすか？」

「…普通に頑張ろうよ。」

まあそんなのんびりまったりした空気の中、謙一が図書室に飛び込んできた。

「どうした謙一。そんな青い顔して。」

「みんな、いいから来て。」

何かあったのだろうか？まあともかく謙一についていく事にした。

「これは…」

「ひどい…」

「何があつたんだ…」

上から友也、恵、僕である。しかしそれ以外言いようがない悲惨さだ。

謙一について来てと言われてやってきたのは廊下の端っこにある空き教室を使った生徒会室だ。その生徒会室の中は、まるで台風とハリケーンと竜巻が通り過ぎたみたい（少し言い過ぎたかも）にメチャクチャだった。窓が割れて、机が転がり、その上や床には書類とガラスが散らばっている。棚と言う棚は壊され、倒されている。床のあちらこちらに人が倒れ、少し血が出ている人もいる。けが人はこの様子ならまだ軽傷だと思うが、気絶をしている。

「謙一。いったい何があつた。」

「実は僕もよくわからない。ただ授業が終わった後にちよつと野暮用を済ませてここに来たら、すでにこんな状況で。」

そうか分かんないか。しかしそれじゃあ犯人の目星も見当がつかないな。

「あつ、犯人は分かるかもしれない。」

嘘つ。なんでわかるの？

「実は去年からの申し送りの中に、反生徒会組織があつて、その連中には気をつけるという内容の伝達を受けたんだよ。」

そんな組織この学校にあつたんだ。てかそれよりこのこと先生に伝えたのか？

「伝えたよ。そのあとお前らを呼び出した。」

そうか。とその時にどたと音が後ろからするから振り返ると、風紀委員と治安維持部と先生と警察官と救急隊員が来た。僕は生徒会室から追い出され、ただだまって生徒会室に立ち入り禁止のテープが張られているのを見ていただけだった。

7話 反抗（ピラニアの如く）

警察署。善良な一般市民ならまずこんなところは来ない…てか来たくない。せいぜい道に迷って交番行くだけにしてほしいと思うが僕と恵は諸事情によりここの警察署の人と顔見知りだったりする。その諸事情は…うんまあ話す時は近いかも。

さて現在僕ら4人は警察署の取調室…ではなく応接室に通された。「なぜここに？」

「つか僕らどうしてここにいろの？」
当り前だろう。現場の前にいたらそりや事件関係者だと思われるよ。でも取り調べだったら取調室に行かされるはずだ。やっぱりあれが原因か？

そんな事を考えていると応接室のドアが開いた。てかよく見たら「いよー。生徒会室の前でボケっとしてた生徒って誰かと思つたら匠に恵じゃねえか。ゲンキしてたかー？つかオヤジさんとお袋さんはゲンキしてるかー？」

でた。このハイテンションを絵にして額に入れて美術館に飾つたような人が。今この場であつたら1週間分の疲れを一気に感じさせるような人が。さっきの悲惨な状況を一千万光年先の果てまで飛ばしそうな人が。恵を見るとやっぱりげっそりしている。友也と謙一はぎょっとしてそれから僕と恵を見ている。

須藤浩太。柵の台署の刑事だ。母さんが柵の台署の刑事課にいた時知り合つたが、この時から会話しただけで疲れる人だった。

今まで黙ってたが僕の両親は警察官である。といつても父さんは国際捜査官として世界中を飛び回っているし、母さんは東京の警察庁に単身赴任で行ってる。警察の人と顔見知りなのはそれが原因だ。このあいだ母さんは海外出張していると云つたが最近になって日本に帰り、そのまま警察庁に行つたらしい。帰ってきたんなら家に戻ればいいのに。

「父さんは海外飛び回っているのではありません。母さんはいま警察庁にいます。帰ってきたら家に帰ってもいいと思いますけど。」

「な〜んだ、会ってないのか。」

つか、僕らが最後に会ったの中学3年に上がる時だ。ホントに放任だから困ったもんだ。

「匠、この人は？」

友也が聞いてくる。まあ知らなくて当然だな。

「母さんがここで刑事やってたんだけどその同僚。」

「あれ、お前の母さんって警察官なんだ。」

「父さんもそうだよ。いま国際捜査官だけど。」

「すげーな、お前の両親！！」

まあこんな話はいいからとつと話を進めよう。

「えっと、まず野島謙一君が第一発見者だという事だね。」

「はい。」

「で、匠と恵と石山智成君が彼に呼ばれて行ったわけだ。」

「『はい。』」

「ところで謙一君。君が最初に現場を見た時と2回目に現場を見た時で違う事があった？」

「いえ、ありませんでした。あつ、でも…」

「なんかあったの？」

「いや、なんか最初に生徒会室を見たとき、なんか違和感があったんですよね。」

「違和感？」

「なんかどこかが違うような気がしたんですけど…：すいませんよくわからないです。」

その後、僕らはいくつか質問をされて帰った。

翌日

『次のニュースです。昨日午後3時半ごろ、##県##市にある柵の台高校の生徒会室で、何者かが生徒会室に侵入し、荒らされたのを同校の生徒が発見しました。この時室内にいた5人が負傷していましたが幸い全員軽傷だという事です。警察では、外部犯・内部犯両面で調べを進めています。』

「なんか早速ニュースになっているね。」

「うん…」

朝の樽山家。今日の朝食の当番は恵なので、恵が作った朝ごはんを食べながらニュースを見ていた。あんな事件があったので今日からしばらく休校になるらしい。

「どうしたの、事件の事考えていた？」

「ぼーっとしてたので心配したのだろうか。」

「うん。今日は休校だけど友也と謙一さそって学校行こうかなと思っ
てね。」

「まあそうね。」

てな訳で朝食を食べ終わった僕らは携帯メールで招集をかけると学校に向かった(ただ謙一は生徒会で緊急会議があるそうでもう学校に行っているとのことだった)。

恵には話さなかったが僕には不思議に思ったことがあった。

犯人はあそこまでして何がしたかったのだろうか？

あれで事件は終わりだろうか？

解決すればいつもの日常が戻るだろうか？

答えはいまだに出ない。

学校に來た僕ら3人を待っていたのはとても多い数の報道陣と野次馬だった。

「うわゝ。」

「ヒマ人が多いのね。」

「すげー野次馬。」

ともかく人が多くて学校に入れるだろうか心配になった。

と思つたらカメラとか記者たちがピラニアの如く僕らの周りをぐるりと回つた。

「今回の事件どう思いますか!？」

「犯人は反生徒会組織だと言われていますが!？」

「自分の学校でこんな恐ろしい事があつた事に対して感想を!」

「一言何か!」

…すこし政治家の気持ちがあつたかも。警備員の人があつてもしばらく身動きが出来ず、結局この集団から抜けられたのは8分23秒後だった。

しかし記者たちつてデリカシーがないね。もっとおとなしく訊けばいいのに。

デリカシーのない子供が増えると言うがまず大人がこんな状態だからじゃないかと思う。

「あれ、友也君は？」

あれ、いない。

「たすけて」

…まだあそこにいた。また疲れそうだ。

事件の手がかりを探しに來たのにこの調子で大丈夫だろうか？心配…。

7話 反抗（ピラニアの如く）（後書き）

ノンキ「この話はあと6話ぐらい続くと思います。」

匠「なが！」

恵「読者の皆様。飽きると思いますがどうか最後までお付き合いいただける方は『しょうがねえな』とおもって諦めて下さい。

8話 反抗（捜査の始まりはいつ？）（前書き）

ノンキ「なんか今回限り登場（予定）のキャラを出しました。たぶんもう出ないと思います。」

匠・恵「ならだすな。」

8話 反抗（捜査の始まりはいつ？）

友也を救出したのはそれから2分49秒後だった。

「ひどい目に会った……」

同情します。てかこっちもひどい目にあつた。

「……お疲れ様。」

謙一がこっちを見て同情した目を向ける。たのむからやめてくれ。その視線が痛い。

「でも結構来る人多いんだね。」

確かにこの学校に来る人は多い。現に今も制服着た人が校門をくぐろうとしている（そして記者からの質問攻めという洗礼を受ける）。

「やっぱりみんな事件は怖いけど、それに負けてるそぶりは見せないらしいよ。」

ふ〜ん。と感心してたら大事な事を思い出した。

「つかお前、会議はいいのか!？」

「さつき終わったよ。」

ふ〜ん。じゃあまず現場を見ますか。

「まあ当たり前だろうな。」

「うん当り前。」

「予測通りだ。」

謙一と別れ、現場に着いた僕たちを待っていたのは多数の野次馬だった。その野次馬は警察官に追い返されようとしている。

「ミステリー研究会の連中がなんかわめいているよ。」

なんだろう？ 野次馬をかき分けて進むと

「だから、この事件はばくらミス研に任せて下さい。」

「これは遊びじゃないんだ。邪魔をしないで。」

まあミス研と警察官が言い争っているが、悪いのはミス研の方だ。
「おや、君たちは探偵倶楽部じゃないか。」

さっきから言い争っていた人たちの中で、メガネをかけている人がこつちに話しかけた。

「そうですけど。あなた誰？」

「俺は遠藤利明。ミス研の会長で3年学年トップである。」

「そうですか。」

「君たちもここの捜査かな？」

「似たようなものです。」

「残念ながらここはミス研の管轄だ。関係ないものは出て行っても
らいたい。」

（（これは警察の管轄だろー！！））

突っ込みたかったがそこは我慢した。てか嫌味なやつだな。学年
トップだって言うけどこつちだってそうだ。

「あれー？匠に恵に友也君じゃないか。どうしたー？」

あれ？って浩太さんがいた。

「いや、現場がどうなっているのか見に来てだけですけど。」

「おまえ、知り合いか。」

うわ、利明先輩が来た。まあこの人はスルーしよう。
嫌味ヤロー

「ふーん。まあいいや。少し見てくかい？」

「えっ、いいんですか？」

「いいよ、いいよ。」

友也驚いて尋ねるが、浩太さんが許可する。

「ちよつと待て、いいのかよ。署長のうちのパパが許さないぞ。」
この年でまだパパと呼ぶのか、このヒト。

「大丈夫。匠と恵のお母さんに許可申請するから。」

「許可する訳無いでしょう……」

「許可下りたよ。匠と恵と友也君に僕が付いていくという条件と、
証拠に触らないという条件で。」

この人、最初から入れるつもりで既に手を打ったんだな。

「すごいですね。さすが警察庁に勤めるだけあって。」

うん、すごい。ついでにうるさい人はボカンと口を開けているだけ。

「さあはいろいろ。」

テープをくぐった時に後ろからぶつぶつ何か聞こえてきて、それが呪いの言葉だった気がするが、気にしないでおう。

鑑識の人や捜査中の刑事さんたちに頭を下げて、僕は生徒会室に入った。昨日あれだけあった紙はみんな証拠として持って行ったんだろう。ひっくり返った机と、倒された棚がそのまま残っていた。「大体持つて行っちゃったからもう何も残ってないけどね。」

てかただの暴力事件にそれほど何もないと思う。犯人は分からないけど。

「そういえば友也君が昨日何か言い淀んでいたけど、何だったんだろうっ?」

そういえばなにか言い淀んでいたよな。何だったんだろう?

「そうか、あの下っ端はあの事知っているんだよな。まあいい。それよりあの素人探偵にどこまで出来るか見ものだかな。」

8話 反抗（捜査の始まりはいつ？）（後書き）

匠「今回もぐだぐだだねえ。」

恵「それよりいつ捜査始めるのよ。」

ノンキ「次の話から。」

9話 反抗（尋問）（前書き）

ノンキ」と言う訳で9話目です。」

匠「ホントこの話はいつ終わるんだろうっ?」

恵「もういいや。」

9話 反抗（尋問）

「いいか匠と恵。犯人は自白するときかならず喉を鳴らし、飲み物を飲む。そこで飲むと自白の言葉を飲み込むんだ。」

そいうと父さんは僕らの頭の上に手を置くとこう締めくくった。
「だから自白させる時は飲み物を飲ませてはダメだぞ。」

小学生の頃、なんかどこかの探偵マンガと同じセリフを父さんが言ってた。ていうかそのまんまだったよ。当時の僕はそのマンガ読んで真似ているんじゃないかと思ってた。

まあそんな昔話はどうでもいい。でも知った所で絶対使わないと思っていたが、まさか数年後に実践するとは思わなかったぞ。

現在の状況は生徒会室の隣の教室で、机を寄せ合って謙一に尋問中。尋問は僕、後ろに恵と友也と浩太さんが立っている。

「……………」

謙一は終始無言。さっきから喉を鳴らしてたんで、飲み物を与えたら全く言わなくなった。自白ではないとはいえ、喋りたくないのだろうか？

「謙一、別に話したくなければ別に話さないでいい。ただ話さなければ話すまでこうするだけだからな。」

なんか嫌な役だな、尋問する側って。なんか脅迫して意地でも話させようって言うのがなんか好きじゃない。でもまあ仕方がないことだろう。

「……………」

それでも無言。

「……………」

相手が無言ならこっちも無言でいるのみ。さすがに第一中の親分と言っただけあって忍耐力はある。でもこっちは刑事の息子だ。忍耐力は負けてられない。

「違和感って言うほどではないんですけど…」

おっ、話し始めた。

「今まで反生徒会組織という組織があるとは聞いてたんですけど、実際にそういう連中がいるとは思わなかったんですね。」

「なんで？」

「反生徒会組織と言う割には活動はしないから、神道先輩がうつそついているんじゃないかとずっと思ってたんで…」

「神道先輩？誰だそれ。」

まあ浩太さんは知らないよな。神道先輩は柵の台高校に2人居る、生徒会副会長の1人で、神道派のトップだ。生徒会の中でもあまりいい噂は無いらしい。

「まあそんなわけで今日まで3か月しか生徒会で働いてないけど、今までの記録に派手な組織運動は無かったから存在しないと思ったんだよ。」

「ふーん。でもなんで生徒会は調べなかったの？存在を調べようと思えば調べられたじゃん。」

「今まで調べなかったのは、つい最近　って言っても去年だけといきなり出来たらしいから、あまり調べる暇がなかったし、もう一つは上から圧力がかってその辺の捜査を打ち切られたらしいよ。」

「それじゃあ幽霊組織って言う事じゃん。」

…恵のツツコミがなんだか随分久しぶりに見える。

「上の圧力って、どこから？」

「よくは分からないけど、噂だと副会長ぐらいのポストの人間だつて。」

副会長か。それじゃあやる事は一つだな。

「何するの？」

友也よ。まずは聞き込みだろ。二人いる生徒会副会長に聞き込みだよ。

という訳で（何がという訳でかはわからないが）本格的に捜査を始める事にした。

9話 反抗（尋問）（後書き）

匠「毎回思っただけどさ。」

ノンキ「何？」

匠「この小説の中身話短いよね。」

ノンキ「うつ」「ぐさっ

恵「それに無理やり終わらせているし。」

ノンキ「ぐう…」「ぐさっ

ノンキ「六甲水先生に書いて載っているコラボ作品もできれば読んでください。面白いです。」

匠「そう思っただったら執筆活動に参加しろよ。」

恵「これしかないなんて最低だよ。」

ノンキ「……………」

匠・恵「黙秘権つかうな!!」

連載無期限休止

毎度、「樽山匠のにぎやかな日常」を読んで戴き
ありがとうございます。

誠に身勝手ながら、この作品の連載を休止させて戴きます。
理由はこれを書き続けるためのネタがないからです。

こんな理由で連載休止はあきれでしようが…
自分でもあきれ理由で申し訳ございませんが
復活まで長くお待ちください。

復活は告知なしで行います。

六甲水先生も

コラボ作品を書いて戴いている中
申し訳ございません。

出来るだけ年内復活を目指します。

10話 反抗（求めるわけは）（前書き）

ノンキ「1ヶ月半もの間音信普通ですいません。」

匠「大丈夫、誰も心配しないから。」

恵「兄ちゃん心配する人自体、今のノンキに居ないって。」

ノンキ「……orz。」

10話 反抗（求めるわけは）

生徒会の副会長は生徒会室にはいなかったが、資料室で見つける事が出来た。

「知らねえな、そんなこと言った覚えもない。」

見た目はまあ、ちよいカッコイ不良といえはわかるだろうか？よくこれでまあ選挙で勝てたもんだと少し感心してしまう。まあそれはともかくだ。

「逆にそんなことを言ったという証拠を持ってこいよ。」

中身はそのまんま不良だなとつっこみたい。

ともかく証拠がない以上追及する事は出来ないの、後片付けをする謙一は置いて、とりあえず警察署へ行くことにした（昼飯は抜き！）。

「進展はほとんどないなあ。まあ神道という奴を叩けば1つや2つ出てくるんだろうが、証拠もない今勝手に取り調べする訳にはいかないからな。」

想像通りの回答ありがとうございます。

こうして1カ月が過ぎたが進展はまったく無かった。警察も証拠がなければ動けないし、マスコミの関心も薄れてきた今となってはもう誰も言わないだろう。

校長も今回の件に関しては早く忘れたいようだ。生徒も自主退学した一部生徒を除いて普段通りの生活に戻った。

こうして今回の事件は迷宮入りをはたし、もう二度と操作をする者はいなくなつた。

(完)

んな訳ねえだろう！！！！！

おい腐れ作者、こんなもの書いてるんだつたら辞めちまえ。

「いや、辞めるつもりないから。」

黙って連載休止したやつが言うんじゃねえ！！！！！！！！

「と言う訳で捜査を続けます。」

「続けるも何も事件翌日じゃん。」

友也よ、そういう事は言わない約束だ。

「でも、捜査方針どうするの、兄ちゃん？証拠は無いんだよ？」

たしかに証拠は無い。ただ僕は真実を知りたい。そりゃ犯人を警察に送る事も大事だ。でもそれ以上に真実の追求が、大事なことだと僕は思う。

「わかったよ匠。こっちもいろいろ八方手を尽くすよ。ところで警察は何をすればいい？」

「まず神道先輩の口座を洗って下さい。あれだけやるには人手がいるでしょうから。」

浩太さんに警察で出来る事を任せると僕は警察署を出た。

「どこに行くんだ匠？」

「兄ちゃん何処へ行くつもりなの？」

「被害者の意識が回復したからどんな事があつたか聞こうと思って。」

「警察が聞いているんじゃない？」

まあその暗い予測はつく。でも

「僕も聞いてみたいんだよ。ところで二人とも来る？」

二人に話を振るとにやりと笑って

「「もちろん。」」

と答えた。

僕はその結果に満足すると、二人を従え、被害者がいる病院へ向かった。

探偵倶楽部は諦めない。

真実と言う名のゴールが
その先にあるのならば。

10話 反抗（求めるわけは）（後書き）

年内再開と言う無茶な事を言っすいませんでした。とくに六甲水先生には多大なる迷惑をかけた事を心より謝罪します。

これから「樽山匠のにぎやかな日常」をよろしくお願いします。

11話 反抗（驚愕の事実）（前書き）

ノンキ「なんか無茶苦茶な話になった気がする。」

匠「その理由は、今まで小説を放置したためにキャラ設定を忘れてるからだ。」

恵「あと下手糞だからというのもあるよね。」

ノンキ「ひでーなおまえら。」

匠「感想まってまゝす。」

11話 反抗（驚愕の事実）

病院についた僕らはまず刑事に止められたが、浩太さんに連絡をもらっていたのか名前を言うとしんがり通してくれたうえに、病室まで案内させてくれた。

「匠と恵は警察にコネを持っているから良かったけど、持ってたかならどうするつもりだったんだ？」

「「さあ？」」

この回答にはあきれたようだ。まあいいけど…。

「被害者たちは目を覚ましましたが、よほどショックだったのかあまり話そうとしません。どうかあまり刺激しないようにして下さい。」

「おい作者。いきなり話変えたら読者に伝わらないだろうに。まったく。」

ともかく刑事さんの案内で病室についた僕らは被害者に合う事が出来た（もちろんノックはしたよ）。

「今は答えたくありません。申し訳ございませんが。」

イキナリ玉砕デス力。…なぜカタカナなのが分からんが。

まあ質問の形が悪かったかもしれないというのは認める。いきなり「事件について聞かせて下さい。」じゃあ誰も話したくなるな。

でもここであきらめたらここまで来た意味がない。

と言う訳で（何が「と言う訳」かは知らないが）、質問の形を変えてみる事にした。

「生徒会やって何年経ちますか？」

皆（刑事さん含め）が「へっ？」って顔をしているが知ったことじゃない…って何かやらかしたみたいない方だな。

「まだ雑用係（下し）端なんで一年目です。」

と言う事は先輩か。

「生徒会の仕事って忙しいじゃないですか。いつもは何やっているんですか？」

「部長クラスになると、暇になるらしいですよ。雑用係（私）たちは生徒会の会議での書類整理や資料作成など忙しいですが。」

「お茶くみなんかもしますか？」

「お茶くみはしますよ。みんな好みが違うので、お茶を用意するのが大変で。」

「神道先輩なんかの時は大変じゃないですか？なんか不良って感じなので。」

すると被害者（もう「少女A」でいいか？）が「とんでもない！」という顔をした。

「神道先輩は見た目や口調からいろいろ言われますけど、実際は生徒や学校の事を生徒会の中で一番考えている人なんですよ。」

初耳だ。そんなこと知らなかった。

「生徒副会長になったのも、お金をばらまいたからだとか言われますが、実際は生徒会の中で一番支持されている人で……あつ！？」

なにかしまったって顔をしているが何かあったのだろうか？

「すいません、今の事は他人に言わないでください。」
何で？

「この事は生徒会の中でタブーだったんです。会長の指示で」

意味不明だ。しかし困った、これでは何も聞けなさそうだ。仕方ないから僕は退散するが、その前に一つ聞こう。

「おまえら黙っているけど訊きたい事無いの？」

今まで何も話さなかった恵と友也に。

「いきなり話振る！？」「」

お前ら用意しとけ。僕だけに任せるな。

「じ、じゃあ一つあるんですけど。」

友也は用意していたのか。

「さっきの話聞いてたら思ったんですけど、神道先輩は生徒の事を考えているんですね。」

「ええ。」

「じゃあ、今回の事件は神道先輩がやったと思いますか？」
すると少女Aはしばらく考えてから言った。

「少なくとも、私はそう思いません。」

11話 反抗（驚愕の事実）（後書き）

想像もしなかった事実が判明し、探偵倶楽部に衝撃が走る。
果たして真実に辿りつく事は出来るのか！？
次回は会長に対して聞き込みをします。
どうぞお楽しみに。

匠「変更しないようにな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3843n/>

樽山匠のにぎやかな日常

2011年1月23日03時25分発行